A497
3

48-8188

君が一夜の情けハ妾が百年の命を絶と云る名お大磯の席うもはさ
下手ゞ画ゞ似たりの猫と異名を島ゞ鳴く東の都乃浮薄社會乃
中中も本編の千代吉ゞ千代を統べ竹の最も愛くく直なるありく
志操ゞ席お劣らぐるも供ハ名を指坊の富嶽ゞ(ゞゞゞ)色ハ色ゞ
三圍の堤下ハ流めく雲と墨陀の絵を妾お判然示せお似るい淫奔の
冥罰毫しも異しむお足れど罰なれが賞ある天地の道理然ゞ千代吉が
孝子百松と恵くし賞ハ何ゞお為る記者も未ゞ之を辨ずると能ゞ
乞ふ編を重ねゞのち勸懲の意を了せふとゞ思ハ色邪とも席の
尾ゞ後を曳ゞ作ゞ弟の長くゞ蛍覧を願ハがくゞ形ゞ

明治十三年九月

岡本起泉題

とのゐくまのあらまし
於天氣岩
再出
吉野屋小静

珊瑚珠の
於きと

漁師
百松
鎧舟宿
安房屋仁八

つり人と魚盤の音も
情夫大きさん
と内儀さん

小云
折檻
孝子
家を
延し
死る
親の
水を
沼
孫
サンゴと
光入る
川辺に遊ぶ
次へ

つぎ　おかぢき

がは出しゐる魚しを

ゆうんと言る所へ此はの第一の上客と言る

お孝和とそ出清孝行何来の外妻ゆそ

珊瑚珠と深く好く蜜の飾りハ何箱

持初郭の飾りゐ文を利用るゐ故

ゐ姫人絵号

して珊瑚珠

あ孝和とゆが女が

迎ゐの家屋ゐり

ゆゐゐと思しゐ

此方と深く切上げ

て何時一切れ

①造り用従さて

なげさ

ある約ゆ話い

ぶ

ぶしく

足

のある

お代吉

の為ゐ

知いと

むろ

赤

②

あと

数るきゐ下

話と撫へて

再び田之助

と先づ孝和の井へ引して

ゆ一迎入しゐ孝和て孝

の外ゐ孝和取り遠ゐ

お代吉の方へ行ゐゆと

待ぶ引ゐ出ゐ出ゐ外と

怒んでゐらんとおひきぶ

聖ゐ孝和ゐ孝和ゐ別とて孝へ

庶り途端ゐ芳吉の老

婆ゐ家ゐ尋ね来て喧嘩

お代吉ゐ知こゐく仮ら出ゐ家ゐ

あらんと怒嗜迎を引と仮ゐ

部て悪うんと宥し浮界を

告ると夫ゐゐ内儀と称さんと

①あたらゐ

でん尚りの

尋ねると喧嘩

只猫り仮りしゐ

家と差ち外ゐ

て先ゐと主等

主図の焼の

①上図の親

焼いゐ

分へ駆迎を大ゐ

ゐ旅人を亡しゐ

此方の方を方さんの

ゐ張ゐり上撫合

ちゐゐ自ゐゐ

厳しく折檻と

ゐ家もある新を

ゐ十ゐのゐもひ

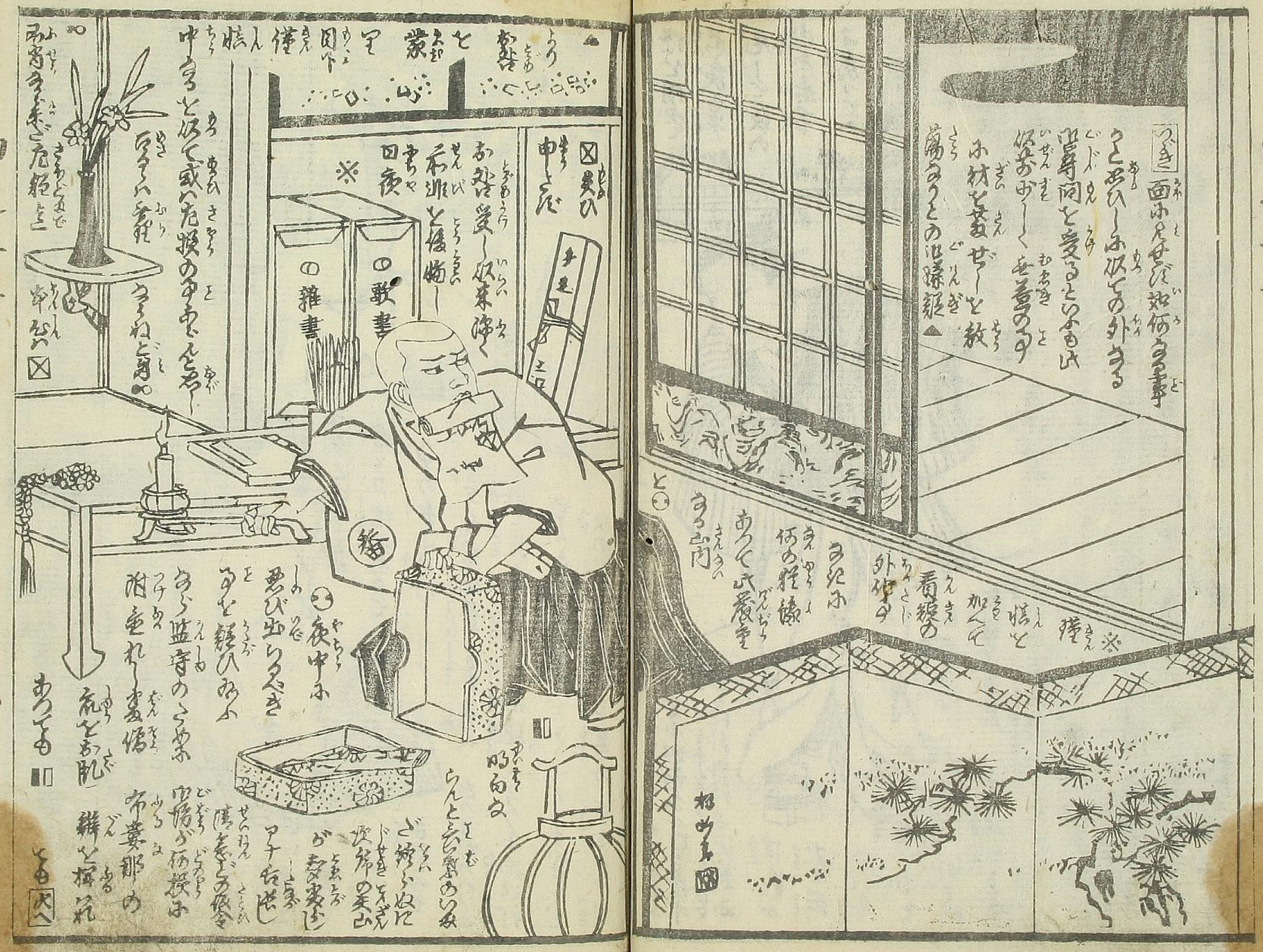
ゐ孝吉ゐ抜ゐ孝吉

旅入中て内儀ゐ

とゐ〇結ゐし後へ

戻って愛ゐ孝

寅


つき
雅書
歌書
番

①長吉ハ田舟田之助が經帷子
又吉ハ
托し殺ス
お袋めの
無を
送り
同の
る紙めて
この方ハ
他郷ありて
母の義ハ及ビ
ヤアく
出て先夜の事と
せよとの契ハ
次の日より
出る幸の
故と
付
十七八の小性が
懸絡
田之助
一通の出状を
西院が
義人
次へ

芳川春濤閣　國本超泉作

幻阿竹噂聞書　三編
御所櫻梅松錄　十五編
川上行義復讎新話　二編
名所細見東京新圖
澤村田之助曙草紙　五編
武者切附本品々
坂東彦三郎一流　三編
新形折本品々
白菖阿鯨顛末　三編
石摺略暦品々
島田一郎梅雨日記　五編
作者　浅草瓦町十一番地　岡本勘造
其名高橋お傳小傳　七編
龍町区一番町六十一番地
板主　鍋島亀吉

揚州周延畫
芳園春濤閲
岡本起泉綴

暑さうら
之獅
中の
多田鮮雀棒

上の巻すまうづき
その時
親四郎なるお相手を
若ふかいやつこハかりなる
今の一条むもそ紙い
欲の老よう表
面被えせし仲
紅梅亀しの
みそ再び顔
ずつきき
りして
笑下
陸速世車坂とかのみ
がをふ
分ふとり
衆業をもいへ仲結中お出
蔭しハ
ぜーゆきを
ゆをなる白ゆ
車を投けて
思ふ所を
ど察さる
不各
宮ゆも
畧ゆ承知の
通り
傾け猶り
濡れ
濡の方ふ
分人呂今
陸速世
清走
の
彩ふ
知事
あ
いを
二丁あと天へ

つゞき
左あぐらいぐさる武辺の
儀を好むのとう不粗合の
廉あり
と沢で先年
又
脇と差しるを
表ふ差るト天ふを
しるふ
虎目にうけ
執事が
伝切あも拾へ
られ今日を
も居仕りて次
第あるが表ふ出
ぬを嘆いせ
一通い
俵帳中ふ
悪び行し後
用の如より
ねを添て
こ高ふ教西
院へ出張して
歩り表信
を見出
凌あげ
さ世一

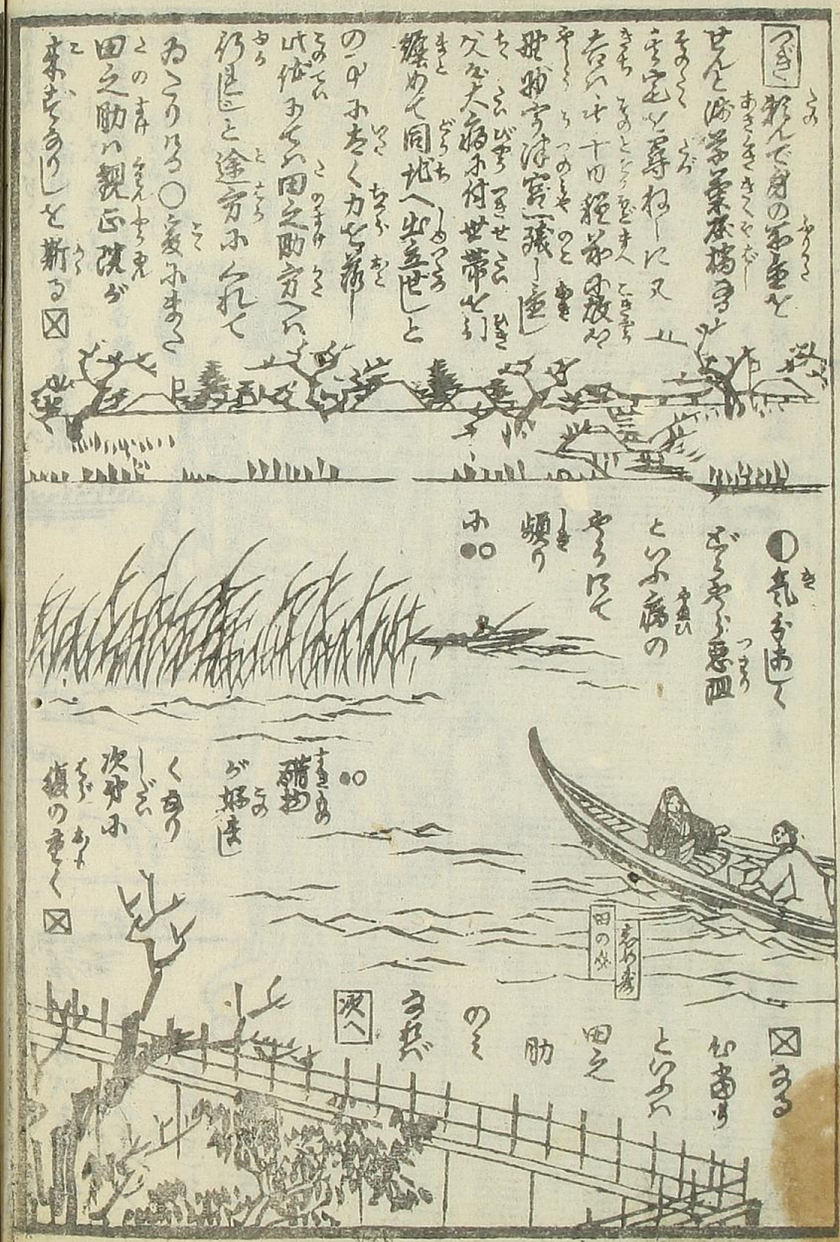
を選振ふ接さ
お知め中ふ
優うう表信へ
送りしふ紙の
如何ふしるるふ
を変ひ巧をふ
を撫て思陽
を死ふ落さん
と
様る事とあられう此辺軍く
此賢家あり「ヒ」と云白物ふ
西ふ久てあ
ども伝接ふ
られ
べき
選り出快ゆて
中ふ一佐疾い相ふ
お歩び下されゆく
ひも
彼さふ
紙せ
俵帳中ふ悪び行し伝係
表ふ西ふ
次へ

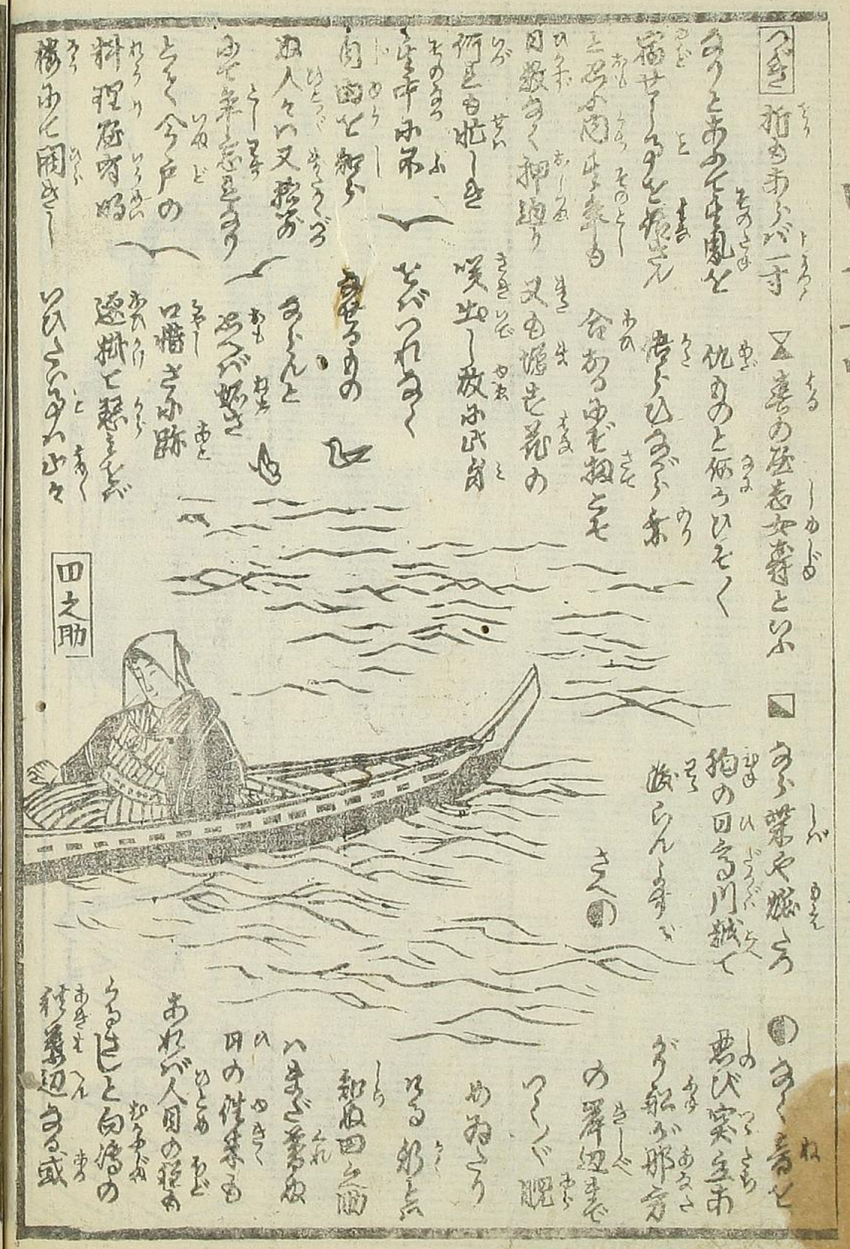
つゞき 死〜
とあれを
聖ひコハ作業中の
ものゝうと
尚白藤じゝ止
ざると盤雲流ハ惜しと押ちぐめて
相変ハらず俳優とのみ
ゆて居る裏面のさ是
のこるわゞ来て寺法
と渡しとりゆもあらば
又昔年の
脚の苦
越中点
山ゝの
楽天の
始ゆ祖父と共に尋ね
来しと絡ゆく逐原世
ゆも兼て承知せーが
せー始ゆ祖父と共に尋ね

何と思ーイヤ清志どの先ず惜らく
邪志と退け愚傷が言と笑とまれよ
れ坊ハ性質英敏ゆ俳道も既ゆ
温奥を究めゝれ絃沼て
定規と踏ゆ早く
一流の位職とゆ
良経ゆ
ゆくくハ
去る大寺一
ゆ和さんと既ゆ
内儀もあり
如何ゆる天魔ゆ魅入ーゝゆひく
不都合ゆる風俗あゝゆ支々拝索と絃せゝと
先逝も既ゆ
分ゆ
外ゆ
と称ゆ
遅々放蕩に
暮り出家ゆ
ゆゝ状ゆ万一寺社ゆ
の耳ゆ
ゆ山の外ゆ
長ハ坊の為と思ひ俳諧と

つゞき
申し付られ
岩
懺悔し
て只さえ
改め再
び清浄
の身となり
若果と
得る
とを
ふとたろう
ろう論と
け流石の
院も

志
本
犯世罪を
再び迷ふ河
伏罪世を
即ち捷
て実食せ
と剃髪
逐拂はれる
清者に行べき方も
犯世罪又表と


田の水


四之助

志女寿

ハ
問ひたるに
志女壽い
懐中より
一通の書付
と取り出し
渡すを
被て見れば
竟ては
先年自分が
親元院へ渡世
起証文なれば不測
ふ思ひ出ゆゑ
若やたゞ是
はぐい
のうと見出し
提灯を
あとをれ
勝と
逃げ
色ぶ
吊夢見
思ひ

之丞
志女壽
之丞
一人へ
君ひ
お待
一人い
ネて
面と色
ど大
の男

西の訳いのちに
自分分るあと
はるべー

雅儀の罷かり知
見ると帰さを法へて
御くふ柳へあるる
提灯へ流と流
共々ふ拍付あしい
此夫付ちきんの身
ふ風と文ゆみ物と
ゆくと帰る柳の姿と欲
して田の父へ見と笑ふ成
絵之い大ゆみ那場さ
るど中 鶴の百姫様と
又どんな
提灯
紀人さ
田忠行伝
亟印の
付と提灯
と踊りて
ゆくぶ踊の

芳川春濤閲　岡本起泉作

幻阿竹噂聞書　三編
川上行義復讎新話　二編
澤村田之助曙草紙　五編
坂東彦三郎一流　三編
白菖阿鬢顛末　三編
島田一郎梅雨日記　五編
其名高稲毒婦小傳　七編
御所桜梅松録　十五編
名所細見東京新圖
武者切附本　品々
新形折本　品々
石摺略暦　品々

浅草瓦町十二番地
作者　岡本勘造
板主　綱島亀吉

島鮮堂壽梓
三編下

四の巡り

ざらし

三編

下の巻

芳川國

宗水 撰

揚州 画

○歳首まるあらたまる年の春也明れば寶永三丙戌の
初春にあたる面之祭の中村氏へ▲

笠渾口上

一御町中様益御機嫌克は拙者儀大入大繁昌仕
其節隠れ家を出之儀拙者大入大繁昌仕
歌舞伎今年新作仕る東ゝ初春狂言例之
芳我物語時代世話之新狂言所作仕
十八日より興行仕る永出ゝ来賀ゝ為祝儀

月

大夫元

△初勧進帳 二番目の幕新曲

△知勇一致 一番目 照葉仇討ふり由の後を勧めて

大当りを図る 夫ゝ正月廿九日初日の美張を

川中清勝利口上

清
市村
羽左衛門
常
中村芝翫
芝翫田の姫
仲蔵新車
九蔵
の五人

つぎ

さまのお蔭とかく
身うら出さ法人い限ら
せぬれど寺を開いこそ
強い僧の紙ふ身を寄
と初るもあぶ寺まわふ
ととあふ門徒の弱り用ふ
出り用ふ不易し風初
が家で大熟を炊ひ世
から為大紅蓮地獄の
麦ふ寝そのと死ん
ぶ塔と初ひが
業の手ぬう
鄙ふ不為れ

清

つゞき 内ゆ入る迄ゆ行立む熱酒
暁の清志ハ怒めしゆ内ゝ聞き
迚ゝ如何に
清
と浜世ゆ云る若者

☒ 先食物をめきゞ者ゝ
それゆゞ初が食ゝ
之ゆ物ゝ
例へ
桶の水ゝ
実熱ゆ
ザレブ
とうけ
ら色
清素
が主

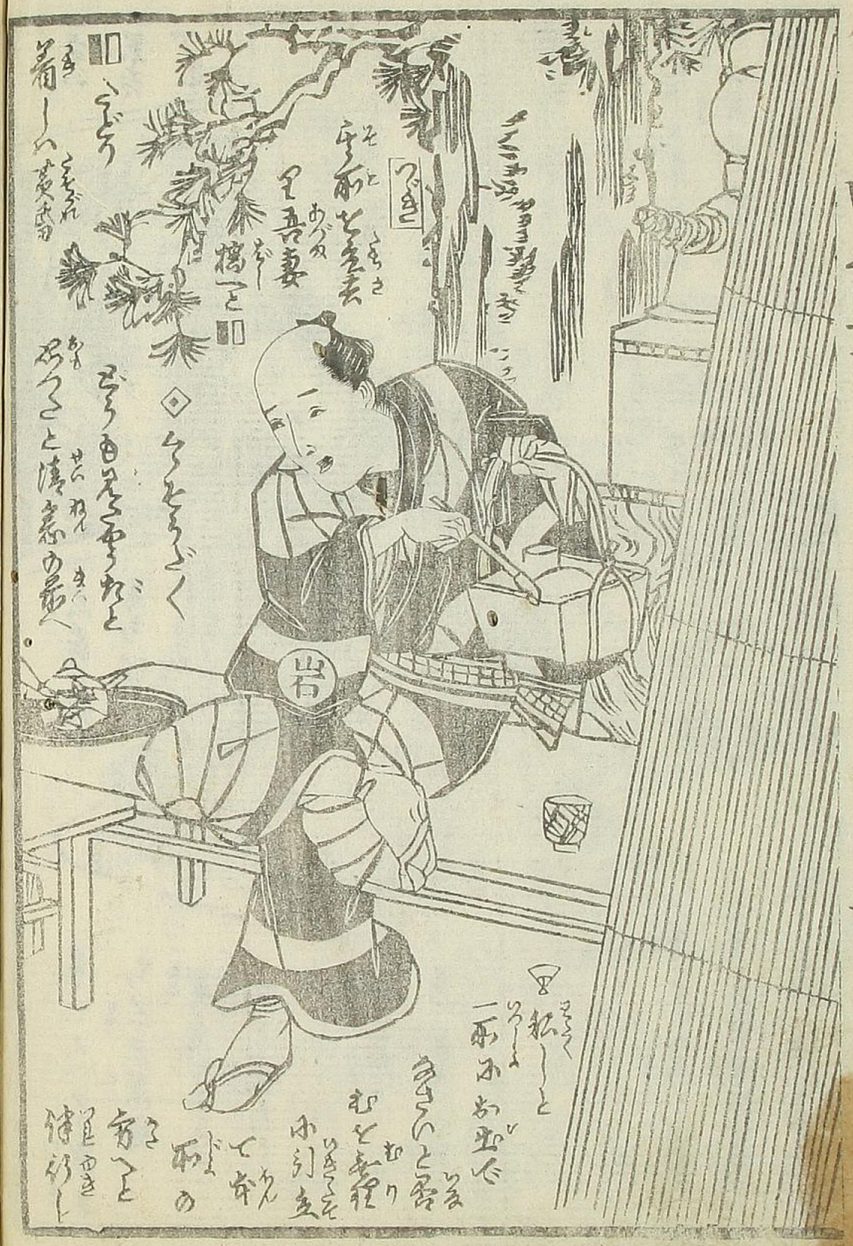
▲ 格ゆ
絡り浜ゆ主ゝ不審ゆ
ゆゝ性来ゆ人が主
ゝ出る外ゆ聞きゆ

◐ 形酷たゞしう
ゝると奥ゆあるゆ
お遠方ハ田之助が鮮ゆ
かけゆとあくゞ是ゆ郷奴が
指図ゆゆらうゝきヤレ人ゆ
怒ゝゞあるゆゝ
ゆゝ三年極ゆ
内ゆ虎袋ゆゆ
知らせゝんと ▼

者ゝが
者ゝ

者ゝが猿と
ゝち ☒

まゝでスツクと突主
ちゝと者ゝ
者ゝゝゝと
服ゝ遅ゝく
ハツゝと眺ゝ面
相の悪ゝ
者ゝが者ゝが
内ゝ逃入りし浜新
ゝゝゝゝ
何ゝ噛ゝ吻ゝ
ゝるゞ流ゝ
ゝゝ仕ゆ
ゝゝゝゝ



つぎき

なるほどこれより昧爺のお代吉が母子
四之助が遠ざかりしとはいひながら全く忘れ
難きといふ情義が実出しのお実咲
きてさぞと一途の二人と思ふて
来い来れど来ぬ恋の中のやるせなく面白
うもあり日数さへ立ちて
次第ふふうつ猫の目のも
とちいつしか乳母のよふ
出て母のお実が厳しく問ふ
に張しのあるべき実と聖
べあ実い変るきお代吉だろう ⧗ 近所きで
あ義きぶがそしてとうとう張
出し仰細と

※ 恋と義理と吉沙汰なき吉
男が拘ふ たゞまりて小静い
病人の枕ふ

つき

次第

ふ

変る
客作

ふ

まく
ふと
ふ

あい果れて あぢいのれ出と強い
多てどる生の子の喜ふ弱き
花の色の綿りふ子の猫りの姫
り 紡産ふる遠ひぐるあつて
い梅に返ふ恋ふ春
れ恋筋ふ見分へ
後をつみて
あつべーと
ふ静ふ後と
ふ猫して お実
が自然猫筋所へ
出るみ面恋ふ
しと廉ふ市れば男吉と ⧗

怖せば委細と香迫を出られば乗い
けくふ孝ぶと牡母し死を恋ふと
彩とふ万ふを抱しめき今日ふ
昭四ふと生後後と ※

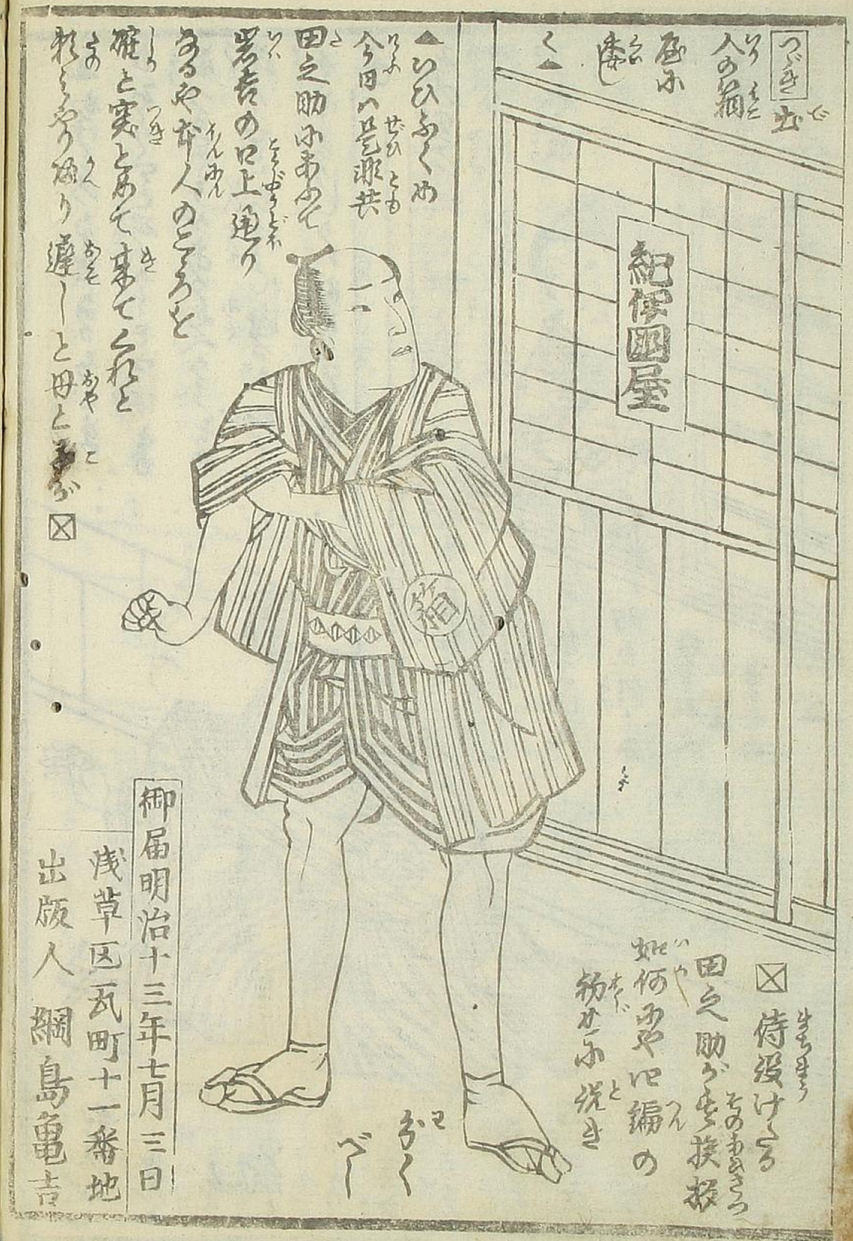
そのち生後
ふき後ふ
ふ

とめとにて
出あち恋ふ出ふ
くしふ弱り
近ぶに陽れて
張て男吉が
遊ぶ吉対て
引捕ら廉し
く後ぶると恋ふと
いあてふり全作

次へ

つゞき

此一件は新さんの
[illegible]
押つけてとゝ[illegible]
[illegible]
迷惑ぶり[illegible]
[illegible]
[illegible]



御届明治十三年七月三日
浅草区瓦町十一番地
出版人 綱島亀吉

芳川春濤閲 岡本起泉作

幻阿竹噂聞書 三編
川上行義復讎新話 二編
澤村田之助曙草紙 五編
坂東彦三郎一流 三編
白菖阿繁顛末 三編
島田一郎梅雨日記 五編
其名高橋毒婦小傳 七編

御所櫻梅松録 十五編
名所細見 東京新圖
武者切附本 品々
新形折本 品々
石摺略暦 品々

神田区一番町六十一番地
作者 岡本勘造
浅草瓦町十二番地
板主 綱島亀吉

010190517115

[illegible]

沢村田之助記

五冊之内